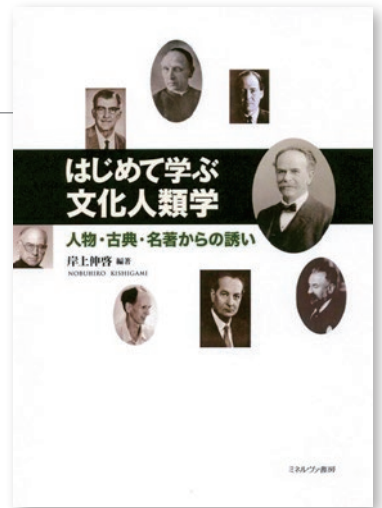


はじめて学ぶ文化人類学

—人物・古典・名著からの誘い

岸上伸啓編著

ミネルヴァ書房／2018年／本体 2,800円＋税



文化人類学は、1980年代半ばにその客観性と権力性に関する問題が提起されて以来、内省の時代を迎え、かつての華々しさを失ったように見える。しかし、その一方で、その問題に応答するために、マルチサイト民族誌など新たな試みや現代世界の課題解決に向けた実践人類学が展開し、文化人類学はテーマや方法論において多様化の時代を迎えた。

2000年代前後からは人間とそれ以外の動物やモノ、技術、環境などとの関係性に着目する研究が注目を浴びようになり、科学技術のネットワーク分析やマルチスピーシーズ民族誌など新たな研究成果が生まれた。これらの研究に共通しているのは、人間やモノを含むさまざまなアクター間の関係性の絡み合いから現象が立ち現れるという観点である。このような立場の研究は、広義の存在論的人類学と呼ばれている。この分野も方法論的な問題を内包しており、文化人類学にブレークスルーが起こったと簡単に結論づけることはできないが、注目すべき動向である。

私は、今後の文化人類学を考えるうえで、これまでの研究成果を踏まえることが重要であると考えているが、人類学史や個別の人類学者に焦点をあわせた日本語による入門書は1980年代半ば以降、約30年間、出版されてこなかった。そのようなときにミネルヴァ書房から話があり、難産の末、誕生したのが本書である。

本書の目的は、この150年あまりの間の文化人類学の展開について、主要な研究者の調査活動や著作、基本概念に焦点をあてながら、できる限り平易に紹介することである。また、代表的な日本人研究者についてもコラムで紹介した。本書では、便宜的に「文化人類学の形成期」(1880～1940年代)、「展開期」(1950～1980年代半ば)、「文化人類学への批判と新たな展開の時期」(1980年代半ば以降)という時代区分を用い、3部構成をとっている。

第1部では、文化の定義、文化進化論、文化伝播論、歴史的個別主義、フランス民族学、機能主義、文化論、文化とパーソナリティ論、総合人類学などを牽引した研究者を紹介する。第2部では、新進化主義、生態人類学、認識人類学、歴史人類学、ポリティカル・エコノミー論、象徴人類学、解釈人類学、ナショナリズム・国家論、イギリス社会人類学、象徴論、構造主義人類学、マルクス主義人類学、実践論などを牽引した研究者を紹介する。そして第3部では、ポストコロニアル人類学や実践コミュニティ論、歴史生態学、ジェンダー論、医療人類学、公共人類学、グローバリゼーション論、広義の存在論的人類学などを牽引してきた研究者を紹介する。また、これまで日本の人類

学界を牽引してきた岡正雄ら12名の研究をコラムという形で紹介している。

本書を通読すれば、文化人類学の課題や方法、概念についての大きな流れを知ることができる。そして、これまでの人間の文化現象を文化要因、環境要因もしくは社会関係などによって理解し、説明する人類学から、文化の境界を越えて複数のアクターが絡み合う関係性からさまざまな現象を理解しようとする人類学へと変貌しつつあることがわかるだろう。なお、紙数の制限で、文化唯物論や文化創造論、マルチスピーシーズ民族誌の研究者の成果を紹介できなかった点は残念である。

近年、文化人類学は多様化かつ複雑化したため、全体の流れであれ、個別研究であれ、理解することが難しくなってきたと思う。そのような状況下で、最新の研究動向を取り上げ、紹介した入門書や参考書は学生のみならず、専門家にとっても重要である。

折しも2018年は、現代の文化人類学全体を概観する教科書や参考書が複数、出版されたという意味でも重要な年となった。本書以外では桑山敬己・綾部真雄編著『詳論 文化人類学 基本と最新のトピックを深く学ぶ』(2018)、奥野克巳・石倉敏明編『Lexicon 現代人類学』(2018)、前川啓治・箭内匡ほか著『21世紀の文化人類学—世界の新しい捉え方』(2018)などが挙げられる。本書を含む最新の人類学の入門書や参考書が、多くの学生や研究者によって読み込まれ、検討の材料となり、新しい人類学の創成につながる出発点となることを心から期待する。

【参考文献】

- 奥野克巳・石倉敏明編 2018『Lexicon 現代人類学』東京：以文社。
 桑山敬己・綾部真雄編著 2018『詳論 文化人類学—基本と最新のトピックを深く学ぶ』京都：ミネルヴァ書房。
 前川啓治・箭内匡・深川宏樹・浜田明範・里見龍樹・木村周平・根本達・三浦敦著 2018『21世紀の文化人類学—世界の新しい捉え方』東京：新曜社。

文 岸上伸啓

人間文化研究機構理事、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授(併任)。専門は文化人類学。主な著書・編著書に『文化人類学—人類を探求し、新たな人間観を創出する学問』(風土デザイン研究所 2017年)、『贈与論再考—人間はなぜ他者に与えるのか』(臨川書店 2016年)、『環北太平洋地域の先住民文化』(SER132号 国立民族学博物館 2015年)、『クジラとともに生きる—アラスカ先住民の現在』(臨川書店 2014年)などがある。